「英語」における語彙教育と科学
―二つの文化を超えて―

桂　山　康　司
（京都大学高等教育研究開発推進センター）

Science and Literature Meet: A Practical Reexamination of Academic Vocabulary for University Science Majors in Light of Poetic Diction

Kohji Katsurayama
(Center for the Promotion of Excellence in Higher Education, Kyoto University)

Summary

Many words now generally viewed as indispensable academic terms for university science majors are also favorites among the most canonical English authors, notably William Shakespeare and John Milton. This paper not only gives some background of that astonishing coincidence, which is never without good reason, but also accounts for the intriguing relationships of the origin and use of vocabulary used by science majors with those used by their literary counterparts. These relationships are illustrated by referring to the epoch-making publication of *The Kyoto University Data-based List of 1,110 Essential Academic Words* (Kenkyusha, 2009) (『京大学術語彙データベース　基本英単語 1110』研究社), featuring, among others, “moiety,” “combustion,” “follicle,” “blot,” and “dissect.”

キーワード：EAP、EGAP、ESAP、学術語彙、詩語
Keywords: EAP, EGAP, ESAP, academic vocabulary, poetic diction

去る平成 21 年 6 月、田地野彰教授を中心とした京都大学英語学術語彙研究グループの努力が実って、待望の『京大学術語彙データベース　基本英単語 1110』（研究社）が出版された。平成 21 年度における有志教員の試行を経て、平成 22 年度より、この語彙集は京都大学英語部会指定図書となり、入学時において英語を京都大学で学ぼうとする者は所属クラスにかかわらず全員が購入し、これを利用して英語力強化に活用することとなった。本書の成り立ちやその理論的背景は、田地野教授他の執筆による論考「総合研究大学における英語学術語彙リスト開発の意義」[1] に詳しいのでそれに譲り、本論考は、この語彙集導入を控えて、これを活用するための一方策―「理系共通語彙」をいかに語彙教育全般、延いては、「学術研究に資する英語（EAP）」教育において生かすか―を示すことに焦点を絞り、論じたいと思う。

さて、科学の発達により、現在我々が頻繁に用いている専門的語彙の示す概念や事象が新たに発見されたわけだが、そのすべての事象、概念に関してそれを示す用語がそのたびごとに新たに造語されたわけではない。すでにあった言葉を用いてその言葉にあらたな意味を付与する、また、今は廃れて用いられなくなっていた言葉に新たなる生命を吹き込むということもあったであろう。「理系共通語彙」は現在の科学の最前線を反映するものである。それが過去とどうつながり、過去をどのように背負っているかを、言葉の前史を探ることで追求する試みは、科学が、概念を担う言葉とどう向き合ったかを明らかにすることに他ならない。この、科学と文化の関係に光をあてる営みは、C. P. スノーが指弾した、いわゆる「二つの文化」[2] という状況を緩和し、理科と文科が融合した教育上の試みとなることが

期待されるものなのである。

科学用語というものは、通常、従来知られていないもの、あるいは概念の発見に際して命名の必要から新たに作られることが多いため、従来ある用語では間に合わず、よって、新たな造語によるか（この場合、ラテン語よりもギリシャ語が造語力に富んでいるため、ギリシャ語によることが多くなる）、あるいは従来英語にすでにとりいれられていたが、その後、あまり一般には顧みられなくなっている語を再利用することによることが多い。一方、文学における表現性[3]の特徴は、近代初期にあっては、古典古代を理想としたため、文学にかかわる者はギリシャ・ラテンの古典文学に造詣が深く、勢い、その用語にあっても、ギリシャ語、ラテン語由来の外来語をいかに英語において活用するかという形で文学的表現が形成されてきた。それが、中産階級の勃興により、文学の受容者が、次第に、古典を理解しない層に属するものが多くなるにつれて、文学の表現において古典語に由来する大仰な語は次第に顧みられなくなっていった[4]。結果、現代にあっては、詩文においてかつては重用された荘重な語彙（‘aureate terms’[5]）が、いまは文学においては顧みられなくなったにもかかわらず、以上のような事情から、科学用語として再び命が吹き込まれるということが往々にして起こることになったのである。よって、この、コンピュータによる語彙分析という客観的データに基づいて選ばれた「理系共通語彙」の中に、英文学史上、優れた作品の表現を支えてきた多数の文学語彙が見出せるのは、単に偶然の所産によるというのではなく、英語という言語が外国文化（特にギリシャ語、ラテン語並びにその文学）に如何に向き合い、それを摂取し利用してきたかを物語る、イギリス的な、広くは西洋的といってよい、文化移入、言語交流の証なのである。

以下において、現在、理系的専門用語として一般的に用いられているものが、かつては、いわゆる詩語（poetic diction）として用いられていたという語を取り上げ、その語の背景を説明することを契機として、更にすすんで、文学的な表現力の豊かさとはどのようなものかを示す、具体的事例を紹介したい。

（1）moiety（理 177[6]）

この‘moi-’といった、見るからにフランス語起源といわんばかりの綴りに始まる語は、実際、中英語期（1100頃～1500頃）に（*OED* 記載の文献初出年は1444年）古フランス語から移入された語でその歴史は古く、法律用語であったものが早くに一般化し‘a half’あるいは‘a part’の意味で広く用いられたようである。近代初期に活躍したシェイクスピア（1564～1616）も詩、劇のジャンルを問わず、散文、韻文の両方において十数度にわたり用いている。しかし、その後は、韻文における使用は影を潜めて、早くも17世紀にいたって、たとえば長大な響きの外来語の使用に長（た）けていたミルトンにおいても、この語は（散文には使用例があるが）韻文においては一度も用いられていない。現在においては、文化人類学の専門用語として19世紀より用例があり、また中世以来の法学における専門用語として細々と生き延びてきたものが、分子科学の隆盛によって、今や、理系の科学者には知らないではすまされない用語となった。‘a group of atoms forming part of a molecule’（*OED*）、‘a distinct part of a molecule’（*ODE*）との定義から分かる通り、かつては原子が分割されて陽子、中性子、さらには中間子が知られるようになったが、今や、分子が分割されて、この‘moiety’という単位での振る舞いが注目されているのだ。（この意味でのOED記載の文献初出年は1935年。）

さて、シェイクスピアはこの語をどうも2音節に読んでいたようだ[7]。四大悲劇の一つ『ハムレット』の開始早々、ホレイショーの堂々たる語りからなる長セリフに登場する[8]のでそれでご記憶の方も多いと思うが、ここでは表現により深い味わいのある『アントニーとクレオパトラ』における韻文からの用例を紹介したい。

CAESAR
The breaking of so great a thing should make
A greater crack. The round world
Should have shook* lions into civil streets　(*shook＝shaken)
And citizens to their dens. The death of Antony
Is not a single doom, in the name lay
A moiety of the world.

DERCETUS

He is dead, Caesar,

....

(William Shakespeare, *Antony and Cleopatra*, V, I, 14–19[9])

カエサル：　このようにただならぬものが倒れたとあらば、その崩落の
響きはさらにただならぬものとなるはずだ。丸い世界なれば、遍（あまね）く伝わり、
取り乱したライオンは、平和な通りへと、市民は、
巣穴へと、逃げ惑ったはずのものを。アントニーの死は
単に一人（いちにん）の命運にあらず、その名に世界の
半ばが存していたのだから。

ダーシタス：　あの方は死にました、カエサル様。

….

（シェイクスピア『アントニーとクレオパトラ』5 幕 1 場 14–19 行）

三頭政治の一角を占め、レピドゥス引退の後は、共にローマ世界を二分し、自らに立ちはだかったいま一人の政敵アントニー（アントニウス）の死を耳にして、（オクタヴィアヌス・）カエサルはそのかつての政敵を、文字通り「世界の半分（a moiety of the world）」が寄りかかっていた存在と称える。そして、実際、通常 5 歩格におかれるブランク・ヴァースの 1 行に占めるこの言葉の詩脚数は 3 歩で、ほぼその半数にあたり、あとの 2 歩分はその死を悼むかのように沈黙にゆだねられる。世界の半ばを支配したものを称えるに、実体をなぞったこれほどの巧みな賛辞、修辞的技巧はあるまいと一応は思われる。しかしながら、一方で、劇は続き、報告者ダーシタスが、アントニーの死の真相を告げるべく行後半の half line で「あの方は死にました、カエサル様」と引き継ぐとき、そのメッセージのあからさまな明白性によって、アントニーの存在が瞬時に消え去り、結果、アントニーの存在を称えるべくあった「世界の半分（a moiety of the world）」という表現は、むしろ後（あと）に残った、ほかならぬ、この言葉の発言者たるカエサルのものを示すと見えてくる。「世界の半分（a moiety of the world）」であったものが、今や「あの方は死にました、カエサル様」という言葉によって一行が完成されたように、カエサルの世界支配もアントニーの死によって完成されたのだ。（死の報告を耳にしたこの一瞬に、カエサルを演じる役者が、かすかに口元をほころばせるか、どうか―見ものである。）――円熟期の詩聖による、見事な筆さばきと感嘆するほかはあるまい。

（2）combustion（理 283）

この語はほとんど現在では、「燃焼」、「酸化」を意味する化学の専門用語としてのみその命脈を保っているといってよく、*OED* においても、科学以外の領域では普通用いられない（‘uncommon’）旨、わざわざ注釈がつけられている。特に、現在においては、spontaneous combustion「自然発火」、internal combustion engine「内燃機関」という言い回しが一般的によく知られていると思われるが、そのような科学上の決まった言い回しばかりではなく、かつて 17、18 世紀には、内乱や戦いの騒乱、喧騒を意味する比喩的な用法で頻繁に用いられ、更には、原義の「燃え尽きること」から発展した比喩的な意味である「破滅（destruction）」の意味でも用いられていた。

ミルトン（John Milton）の代表作『楽園喪失』第一巻、物語が始まるやこれより述べる物語の梗概を語る一節においてこの語は現れる。Satan が天上界における戦いに敗れ地獄に落とされその灼熱の海でいまや呻吟する―

Him the almighty power
Hurled headlong flaming from the ethereal sky　45
With hideous ruin and combustion down
To bottomless perdition, there to dwell
In adamantine chains and penal fire,

Who durst defy the omnipotent to arms.
(John Milton, *Paradise Lost*, Book I, 44–9[10])

かのものを万能の神は
真っ逆さまに天空から燃えさかるままに投げ、　45
おぞましい失墜（堕落）、破滅によって下は
底なしの堕地獄へと追いやり、そこに住まわせた、
金剛石の鎖に繋がれ罪業の炎に包まれたままに―
全能の神に公然と戦（いくさ）を挑んだかのものを。
（『楽園喪失』第1巻、44–9行）

この一文の最初の言葉‘Him’（44行目）がSatanを指すことは、コンテキストから明らかだが、それを修飾し、明示的に説明している部分は、遠く離れてこの一節を構成する最後の行、‘Who’で始まる49行目全体である。関係詞で修飾するにはあまりに遠い位置だが、これは、この一節の視覚的形状において、‘Him’は頂上の中央にあり、それを修飾する関係詞節は底辺にあるという配置が暗示するように、Satanが天上界の熾天使の高位から堕地獄の奈落に落ちた落差を図像的に表象しているのである。そしてその2者を結びにくくさせている距離は、現在のSatanが昔の姿とは似ても似つかぬ、遠く離れたみじめな存在になってしまったことを示唆している。その間に挟まれた部分は、一番上の行には‘the almighty power’があり、これは変わらず今も天上界にあって、その力を行使し、次行からの部分にはSatanを地獄に落とした様子を描く部分が挟まり、そのなかに問題の‘combustion’なる語は現れる。ここでは、‘ruin’が比喩的な意味で「堕落、破滅」を意味するように‘combustion’も「破滅」を意味している[11]と思われるが、‘ruin’の語源上の意味が、より具体的な物理的「落下（falling）」であり、その原義がこのコンテキスト（前行の‘hurled headlong’や後の‘down’といった表現を参照）において、はっきりと谺（こだま）しているように、‘combustion’においてもまた、コンテキストに注意すれば（前行にある‘flaming’、並びに2行後の‘penal fire’を参照）その語源上の「燃焼」という語義がまだ感じられる。このようにミルトンは、アングロ・サクソン系の語彙を用いて具体的描写をした後で、その比喩的意味合いを、（ギリシャ・）ラテン系の外来語による抽象的表現において言い換えることで、この場面でのSatanの「落下」の持つ精神的な含意を示唆しているのである。‘ruin’なる語に具体的「落下」という意味と比喩的「堕落、破滅」という意味が同時にあるように、ここでのSatanの天上界からの崩落の描写は、Satanの精神的、比喩的な意味での「堕落」を具象化したものなのである。同様に、「罪の業火」に焼かれている姿が暗示しているようにSatanは堕地獄で「破滅（combustion）」したのである。

（3）follicle（理171）

1980年代より、PCという言葉を時に耳にするようになったが、現在ならすぐに連想するpersonal computerの略語のことではない。‘political correctness’あるいは‘politically correct’の略で、「政治的に正しい」とは、言葉遣いにおいても、偏見のない物言いをしようという主張である。殊に、性的差別（sexism）や人種的差別（racism）などの差別感情を含む言い回しを避けて中立的な言い方をしようということだ。たとえば、‘lame’は使わずに、「（どの点においてかを示す）副詞＋challenged」という形式を用いるのが特徴的なのだが、この場合は「身体において」＝‘physically’＋challengedとなり、‘physically challenged’「身体上の困難を背負った」と言い換える。‘blind’は‘visually challenged’、‘short-sighted’あるいは‘weak-sighted’は‘optically challenged’「視覚において不自由な」となり、‘deaf’は‘aurally challenged’、‘dumb’は‘orally challenged’または‘vocally challenged’、さらに、‘stupid’は‘cerebrally challenged’「脳の努力を必要とする」と言い表すこととなる。そもそも、本来語には感情が入り込みやすく、偏見という否定的感情においても然りで、結果、アングロ・サクソン以来の、日本でいえば「大和言葉」にあたるものが避けられて、ギリシャ語、ラテン語から取り入れられたいわゆる学術語が、客観的に対象を表現するという特性が買われて、日常語に取って代わることとなった。その結果、ちょっと聞いただけでは何を言っているのかわからないような言い回し、たとえば、‘vertically challenged’「垂直面で困難を強いられている」→「背が低い

(short)」というような、むしろ、政治的に過敏な風潮を茶化すような、戯言的な言い回しも出てきた。そのような表現の一つとして、この‘follicle’は登場する。厳密にはこの語の副詞形だが、‘follicularly challenged’なる言い回しがあって、簡明直截にいえば‘bald’「禿頭の」のことである。この語はラテン語起源で、原義は「小さな袋」だが、解剖学上の専門用語として、そのような形状の人体組織、なかんずく、「毛穴」を指す語として用いられるようになったが、決して、人口に膾炙した語ではない。あくまでも学術語である。PC の主張にもかかわらず、‘follicularly challenged’なるお堅い言い回しは、ユーモアの表れとして言及されることはあっても、‘bald’に取ってかわる日はきっと来ないであろう。それは、この表現があまりに迂言的で、日常的表現からほど遠いと感じられるからである。政治的主張は、どれほど‘correct’なものであっても、言語的感性によって裏打ちされなければそれが根付くことは稀なのである。

（4）blot（理 31）

‘correct’ということで、すぐに連想される英文学史上の偉大な詩人はアレグザンダー・ポープ（Alexander Pope）である。若い時分に知り合った先輩詩人で批評家の William Walsh（1663–1708）に、いままで‘correct’なる大詩人はいなかったと諭されて、ポープがそのことを詩人として達成すべき生涯の目標としたことは有名な話である。その、正確さ（‘correctness’）を旗印にしたポープが、前時代のシェイクスピアへの一般的評価であった、溢(あふ)れかえる表現の豊かさ―ルネサンス的豊饒の角（cornucopia）―に対して、古典主義的立場から、冷や水を浴びせかけたのは当然の成り行きであったと言うべきであろう。

Not but the tragic spirit was our own,
And full in Shakespeare, fair in Otway[12] shone:
But Otway failed to polish or refine,
And fluent Shakespeare scarce effaced a line.
Ev'n copious Dryden wanted, or forgot,
The last and greatest art, the art to blot.
（*Horace Imitated: Epistle I of Book II*, 276–81[13]）

我が国に悲劇的精神がなかったと言っているのではない―
シェイクスピアにおいては遺憾なく、オトウェイにあっても立派に、発揮されている。
しかしオトウェイはといえば、彫琢も洗練も知らず、
言葉溢(あふ)るるシェイクスピアにいたっては、ほとんど 1 行も削除することがなかった。
堪能なドライデンですら、あの創作の奥義―
消去の術―を弁えず、等閑(なおざり)にした。
（『ホラティウスに倣いて』第 2 巻第 1 書簡、276–81 行）

この「消去する」技は、古典主義的文学観から言えば、溢れかえる想像力よりも重大なもので、表現を彫琢し、無駄なく「正確に」表現することこそ、ポープの目指す詩的表現の理想であった。

もちろん blot は「染み」「染みをつける」の意味だが、そこから、一旦書いた文章の不要な字句を消す際に、上からインクを塗りたくって読めなくしたことから、「消す」の意味が生じた。ポープの用例はこの意味で用いられたものである。それが今や、DNA 解析など生物分子の重要な分析手段となった blot analysis「ブロット分析法」の普及により、科学者に一般的に知られる専門用語となった。分析のために混合物の成分を化学処理した紙の上に並べるのだが、なぜそのようなことをするかという目的はともあれ、それは「染みを付ける」行為に他ならない。これには、タンパク質の分析を行う Western blot analysis, RNA の分析を行う Northern blot analysis、DNA の分析を行う Southern blot analysis がある。

現在、blotting という DNA 解析の技が、人というものを解明する営みの根幹にあるということは、現在において

もまた、blot する技は、ポープの言葉にあるように、「最大にして、極めつけの技（the last and greatest art）」であることを示している。この用語における偶然の一致は、時代を越えて言葉が用い続けられることの時に垣間見せる神秘が感じられ、実に興味深い。

（5）dissect（理 280）

科学が自然を物質の塊として客観的に捉えることでその力を大いに発揮してきたことは言うまでもない。しかし、現在、「自然」を一般に表す nature という言葉が専ら外的物質的世界全般を意味するようになったのは比較的最近のことである。そして、外なる自然に親しむ経験から、実感に従って詩が読まれるようになったのもまた新しいことで、そのことをほぼ最初に行ったとされるイギリス詩人が、ワーズワス（William Wordsworth）である。ワーズワスは、自然には物質にとどまらない何か神秘的な力があると信じており、それゆえ、彼は、科学のもたらした人工的な近代性を嫌った詩人でもあって、18 世紀までなら詩人は都会のロンドンに住み、狭い文学サークル（coterie）内で詩作を行うのが通常であったが、ワーズワスは自然に親しむことを好み、田舎の湖水地方に隠棲した。その詩人が、有用な知識を与えてくれるはずの本も読まずに、ただ自然に親しむばかりであるのを、友人が訝ってこれを諭すという作品「忠告と応答（“Expostulation and Reply”）」に続けて、今度は、詩人がその友人に逆に忠告するという構成の詩「攻守所を変える（“The Tables Turned”）」において、科学の在り方をやんわり批判した一節のなかに、この語‘dissect’は現れる。

Sweet is the lore which nature brings;
Our meddling intellect
Misshapes the beauteous forms of things;
－ We murder to dissect.
（“The Tables Turned”, St. 7[14]）

自然のもたらす知見の香（かぐわ）しさよ。
されど、人は、おせっかい焼きの知性によって
麗しい自然の姿を歪めてしまう―
解剖しようとして殺してしまうのだ！
（「攻守所を変える」第 7 連）

荘子による「渾沌」の寓話を思い出すが、むしろ、共に詩集を出した仲であったコールリッジ（Samuel Taylor Coleridge）が詩を有機的なものとしてとらえていたことを思い起こすべきかもしれない。科学は、分析を得意とし、結果、物としての細部を重んずるばかりに、生命を育む有機的な全体像はとらえ損ねたというのである。物質の塊として自然をとらえる新興科学に対して、詩人は、その解剖という方法論の限界を鋭く指摘することで、科学（‘science’[15]）に代表される、書物を通じて伝えられる間接的知識ではなく、自然に親しむことで得られる直接的知（‘lore’）を全身で感じ取るように説いているのである。最近の ecology 思想の源泉の一人としてワーズワスが祭り上げられている所以である。

以上、理系語彙を文学的背景と結び付ける具体例を数例挙げたが、ここで、この語彙集を活用する一助として、殊に「理系共通語彙」を取り上げたことの理由について触れなければならない。

全学共通教育として英語を教える教員は、基本的に、文科出身のものが多いのが現状である。言葉の働きそれ自体の特性を追求することを直接的な研究対象とするものは、既存の学問分類によれば、文学部を中心とする関係学部出身者となるわけであり、そう考えれば、教養の涵養と学術的言語技能の育成をこととする教員が文科出身であるのは、ある意味、当然であろう。よって、この語彙集を用いる「文科出身の」教員が、最も苦慮する部分が「理系共通語彙」ということになる。結果、何の心構えもなく、ただ書物の構成に従い、共通語彙の後に、「理系共通語彙」に進めば、

単に、意味を鵜呑みにさせるといった、高校までの受験的態度に終始する恐れがあり、そうとなれば、この語彙集の優れた特徴の一つである、「文系・理系共通語彙」「文系共通語彙」「理系共通語彙」という分類の趣旨が生かされないことになる。これは、学術上のこのような頻度上の偏りを、言葉のプロである英語教員が如何に融和し、語彙の背景の中に、言葉の歴史、延いては文化全体の歴史を見、そこから発ち現れる、現代文明の問題点を浮き彫りにする授業を展開する材料とする、いわば、原石なのである。この語彙集の最大の特徴は、コンピュータを用いた、膨大なデータ処理により担保されたその客観性にある。それが示す、現代のアカデミズムのもつ歪み―これこそが、スノーの言う「二つの文化」という問題である―を、語学担当教員が自らの力量において乗り越え、文科、理科という二つに遠く隔てられたと見える狭間に架橋することが期待されているのである。

その具体例の一端が、上に示した（1）～（5）であるが、翻って、次に、外国語教育における「理系共通語彙」の活用の着眼点について、更なる例を付け加えながら、整理を試みたい。以上の例が示すのは、

1. 現在用いられている理系的専門用語が、かつては、文学語として用いられていた場合。→上記（1）、（2）を参照。
2. 文科系にとっても有用な語彙が、理系にとっても必須の語彙となっており、その意味における交流が示唆的な場合。→上記（4）を参照。
3. 「理系共通語彙」のなかにある語彙が、過去の文学作品において、優れた表現性を与えられている場合。→上記（5）を参照。
4. 「理系共通語彙」のなかに、現在の文化を考える上で重要なトピックと関連するものがある場合。→上記（3）を参照。

ここで注意すべきは、引用されているポイントとなる文例が―具体的には、‘a moiety of the world’、‘with hideous ruin and combustion’、‘the last and greatest art, the art to blot’、‘we murder to dissect’、‘follicularly challenged’であるが―構文においても用語においても比較的平易であるということである。詩の一節や決まり文句であることからリズムが整っており、その意味で記憶しやすく、また、学生に更なる学習上の負荷を与えないためにも、全体的に平易な文のなかに target となる言葉が含まれる文例を探すことが好ましい。語彙教育において忘れてはならないのが、この例示による習熟である。そのためには、いかに適切な例文を提示できるかが教員の努力目標となろう。

以上、言い回しや例文の提示を基本として語彙を定着させる方策を見てきたが、そのほか、語源に着目して、多くの語彙を関連づけることで語彙の定着を図ることも考えられる。つまり、

5. 語源を調査し、その語の構成要素が、文系、理系を問わず、多様な語彙と共通し、相互に関連付けられる場合。

具体例 1：catalytic（理 71）、hydrolysis（理 146）、lysis（理 234）、lyse（理 298）は analytical（共 209）と関連付け、更に、analysis、analyse にも言及して、相互関係を説明の上、まとめて覚えさせると同時に、ギリシャ語起源の外来語の持つ共通した性格について、理系共通語彙の専門語に多く現れることと関連付けて解説する。

具体例 2：elution（理 278）は、dilute（共 334）と関連付けてラテン語起源（<*e*- out+*luere* wash）の外来語であることを説明する一方で、同様の語構成をもつアングロ・サクソン起源の本来語 washout（理 322）と対比することで、本来語の具象的、日常的な意味合いと外来語の持つ抽象的で、専門的なニュアンスとの相違を解説する。

「理系共通語彙」をいかに文科と融合するかについて、具体的な例示を主眼として、述べてきた。以上の例が、それぞれの教員の得意とする分野において具体的な教授法を工夫する際に、いかばかりかでも参考となることを期待しつつ、また、『京大学術語彙データベース　基本英単語 1110』の導入が、京都大学における英語教育を、決して、画一化させる結果に導くのではなく、むしろ、教員の個性が発揮されることで多様な教育の実践を引き出す契機となることを切望して筆を擱く。

註

1）『京都大学高等教育研究』第 13 号、121–31 頁。また、金丸敏幸他「京都大学学術語彙データベースの構築—学術目的英語のための教材開発に向けて—」（『信学技報』（2009–11）、39–44 頁）をも参照のこと。

2） C. P. Snow, *The Two Cultures and the Scientific Revolution*（1959）参照。後に、第二部として *The Two Cultures: A Second Look*（1963）が加わり、現在は、Stefan Collini の優れた序文付きで再版されている。（Cambridge Univ. Press, 1998）

3） 今は散文によることが主流となったが、従来は韻文によることが多かった。

4） 初期近代にあっても、古典由来の語彙を英語の表現に生かすには、相当の言語的配慮が必要で、初期近代から、新古典主義の時代といわれるほどに古典が尊ばれた 18 世紀初頭に至るまで、それを使いこなし、詩的表現として生かす術（すべ）を心得ていた詩人となれば、その数はあまり多くなかったといわなければならない。

5） Cf. Henry Cecil Wyld, *Some Aspects of the Diction of English Poetry* (Oxford: Basil Blackwell, 1933), pp. 29, 31.; John Cooper Mendenhall, *Aureate terms: a study in the literary diction of the fifteenth century* (Lancaster: Wickersham, 1919).

6） 「理 177」とは、『京大学術語彙データベース　基本英単語 1110』中の「理系共通語彙」177 番にある語という意味である。同様に、「共 209」は、「文系・理系共通語彙」の 209 番にある語ということを示す。

7） よって、‘moi’ty’ のように表記する版もある（代表的なものをあげれば、*The Riverside Shakespeare* がそうである。）

8） 1 幕 1 場 90 行。

9） この論考を通じて、シェイクスピアからの引用は、*The Complete Pelican Shakespeare*（Penguin Books, 2002）による。

10） ミルトンからの引用は、Alastair Fowler (ed.), *Paradise Lost* , second edition（Longman, 2007）による。

11） ミルトンの注釈者として名高い A. W. Verity は、ここでの意味を ‘utter destruction’ と説明している。一方、ミルトンは『楽園喪失』の別な個所（第 6 巻、225 行）では ‘confusion, turmoil’ の意味でこの語を用いている。

12） Thomas Otway（1652–85）イギリスの劇作家。代表作は *Venice Preserved*（『護られたヴェニス』）（1682 初演）。

13） ポープからの引用は、Pat Rogers 編 The Oxford Authors 版（Oxford Univ. Press, 1993）による。

14） ワーズワスからの引用は、R. L. Brett and A. R. Jones (eds.), *Lyrical Ballads*（London: Methuen, 1963）による。

15） 引用した一節に引き続く行（“Enough of science and of art”）に ‘science’ なる語が、‘lore’ と対比されて、あらわれる。‘science’、‘lore’ の両語には、共に、古くは「知識」、「学問」の意味があり、ここではその原義がふまえられている。